

内科同窓会リレーエッセイ

「聴診器、使ってますか？」（三田村先生）に答えて

「聴診の達人はシーラカンス？」

小川 聡（49回）

内科学教室同窓会会長

三田村先生へのメッセージ：先生より4歳年上の私ですが、最近では老人性の高音難聴のためAR雑音が聞き取りにくくなってきましたが、聴診器が私の命であることに変わりありません！小川聡クリニックHPの「院長の独り言」という連載で、聴診の大切さをたびたび取り上げてますので、一度見てください。

三田村先生の体験には後日談がありますので、追記せてもらいます。

あの大俳優さんが腰痛で慶應病院へ入院してこられたのは、1981年4月末のことでした。連休前の日曜朝でしたが、循環器当直の三田村先生から、「椎間板ヘルニアの疑いで整形外科に入院されているY.I氏ですが、どうもおかしい、動脈瘤かも」と連絡が入りました。まだ慶應に導入したての断層心エコーを使いこなせるのは私以外にはおりませんでしたので、病院に出向き、早速ベッドサイドで検査したところ、A型大動脈解離と診断できました。あと少し診断が遅れていたら、動脈瘤破裂に至っていたと思われます。まさに三田村先生のお手柄です。といっても、三田村先生は診断だけつけて、そのまま晴れ晴れと留学されてしまい、後に残された私は、5月の連休中もずっとICUに泊まり込みで、連日数時間おきに検査を繰り返していました。すると少しずつ動脈瘤が拡張していることが判明し、心臓外科の当時の井上正教授に進言して、緊急で開胸手術を実施していただきました。私も立ち会わせてもらい、後ろから術野を覗き込んだところ、拡張した大動脈壁は紙のように薄く、中が透けて見えるほどでした。表面には血液が滲んでいて、まさに破裂寸前でした。無事回復されて、ガウン姿で奥様とともに慶應病院の屋上から

駐車場を埋め尽くしたファンに手を振られた、40年前のあの感動的シーンが思い出されます。



ところで、私が聴診の奥義を学んだのは恩師中村芳郎先生（36回）からです。中村先生は、1967年に Philadelphia の Hahnemann 医科大学から帰国され、当時としては画期的なアメリカンスタイルの臨床心臓病学を慶應に持ち帰られました。1970年に卒業した私は、循環器内科を回った時に、中村先生の格好良さに圧倒されました。早朝回診には、Brooks Brothers NY のブレザー姿で颯爽と病棟にこられ、白衣も着ずにおもむろにポケットから聴診器を取り出して患者さんを診察されていきました。中村先生は、聴取した心音を「タン、タ・タ」とか「タ・ラ、タ・タ」とか、上手に声で表現され（ちょっと英語訛りがあるところが魅力的でしたが）、我々教え子たちの聴診への興味を高めてくださいました。そんな聴診の達人の中村先生を、白亜紀に絶滅したとされる伝説の古代魚「シーラカンス」にたとえる者（言い始めは和井内由充子君？60回生）もいました。もちろん最大級の敬意を込めてのことでしたが、ご本人はそれ

を大そう気に入られて「自分もシーラカンスと呼ばれるような古い人間になってしまったよ」と嬉しそうにされていました。

その中村先生は私より一回り以上卒業年度が上ですが、いまだに **Braunwald** の教科書の新版が出ると誰よりも先に入手されて、前版とどこが変わったかを見つけるのを楽しみにされる勉強家です。私も聴覚は年齢相応に減退しているのですが、機会があれば聴診でお手合わせ願いたいと思っていますところです。今だに愛用している「黄金の **Littmann Master Cardiology**」で。

次のバトンをシーラカンスにタッチしたいと思いますが。